

小 学 校

平成28年度

教育研究員研究報告書

総合的な学習の時間

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	1
III	研究の仮説	2
IV	研究の方法	2
V	研究の内容	3
1	基礎研究	3
	(1) 探究的な学習の捉え方	
	(2) 協働的な学習の捉え方	
	(3) 『アクティブ・ラーニング』の視点を生かして」の捉え方	
2	調査研究	4
	(1) 調査のねらい	
	(2) 調査概要	
	(3) 調査結果と考察	
3	授業研究（研究主題に迫る手だて）	8
	(1) 児童とつくる学習計画	
	(2) 他者との関わり	
	(3) 思考ツールの活用	
4	実践事例の単元イメージ	11
5	実践事例	12
VI	研究の成果と課題	24
1	研究の成果	24
	(1) 基礎研究	
	(2) 調査研究	
	(3) 授業研究	
2	今後の課題	24

研究主題

探究的・協働的に学ぶ総合的な学習の時間の在り方 —アクティブ・ラーニングの視点を生かして—

I 研究主題設定の理由

社会が加速度的に変化する中で、これからの子供たちには受け身で対処するのではなく、社会的・職業的に自立した人間として、伝統や文化に立脚し高い志と意欲をもって蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断することが求められる。また、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働して、新たな価値を生み出していくことも求められる。文部科学省「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」（平成28年8月28日）では、これまでの知識重視か思考重視かの議論に両方が重要であると結論付けた。その上で、「アクティブ・ラーニング」の視点から学習過程を質的に改善することを目指した。「アクティブ・ラーニング」の視点とは、「学び」の本質となる「主体的・対話的で深い学び」の実現である。

- 「主体的な学び」とは、学ぶ意味と自分の人生を主体的に結び付けていくこと
- 「対話的な学び」とは、多様な人との対話や先人の考え方などを生かし考えを広げること
- 「深い学び」とは、習得した知識や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせて、学習対象と深く関わり、問題を発見・解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想・創造したりすること

これらの視点を、総合的な学習の時間では以下のように捉えた。

- 「主体的な学び」とは、児童が探究の学習過程の中で自分事として課題を設定し、課題解決までの道筋を描きながら学習活動に取り組むこと
- 「対話的な学び」とは、他者と協働しながら、問題の解決や探究活動に取り組むこと
- 「深い学び」とは、実社会・実生活に即した学習課題について探究的に学ぶ中で、各教科等の特質に応じて育まれる見方・考え方を総合的に活用すること。特に、「整理・分析」の学習過程で、課題を俯瞰して捉え、内省的に考えるという探究的な見方・考え方を働かせること

上記のようなアクティブ・ラーニングの視点を生かして、総合的な学習の時間の各学習過程において改善すべき点を明らかにすることができると考えた。

本研究部員の所属校において、総合的な学習の時間に関する実態調査を行った。その結果、総合的な学習の時間に意欲的に取り組んでいる児童は多いが、事象の中から自ら問いを見いだすこと（課題の設定）や、集めた情報を基に自分の考えを形成すること（整理・分析）に苦手意識をもっている児童も多かった。また、教員に対する実態調査からも、児童の実態に応じた指導に難しさを感じているということが明らかとなった。

以上を踏まえて、本研究では、「探究的・協働的に学ぶ総合的な学習の時間の在り方—アクティブ・ラーニングの視点を生かして—」と研究主題を設定した。

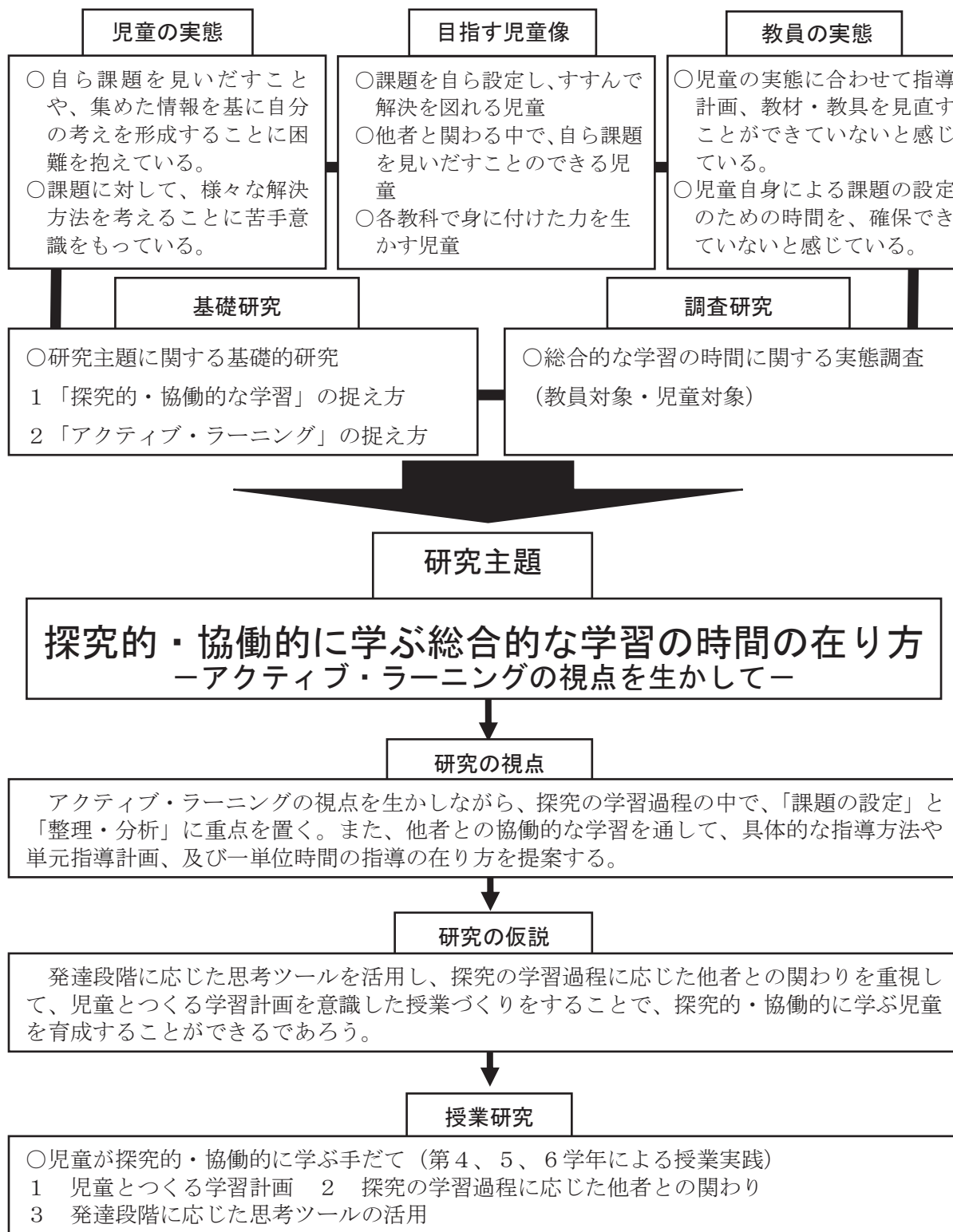
II 研究の視点

アクティブ・ラーニングの視点を生かしながら、探究の学習過程の中で、「課題の設定」と「整理・分析」に重点を置く。また、他者との協働的な学習を通して、具体的な指導方法や単元指導計画、及び一単位時間の指導の在り方を提案する。

III 研究の仮説

発達段階に応じた思考ツールを活用し、探究の学習過程に応じた他者との関わりを重視して、児童とつくる学習計画を意識した授業づくりをすることで、探究的・協働的に学ぶ児童を育成することができるであろう。

IV 研究の方法（研究構想図）



V 研究の内容

1 基礎研究

(1) 探究的な学習の捉え方

「探究的な学習」とは、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の活動であり、その学習活動とは、学習指導要領に示された四つの学習過程「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」のことを表している。教員がこの活動を意図的に計画していくことで、探究的に学ぶ児童の育成につながると考えた。探究的な学習を達成させるためにも、各学習過程において以下のような指導が重要であると捉えた。

表 1 探究的な学習における各過程の指導上の留意点

学習過程	○指導上の留意点
課題の設定	<ul style="list-style-type: none">○児童が自ら課題をもち自分事として捉えられるように、教員は意図的な働き掛けを行い、学習対象との関わり方や出合わせ方を工夫すること○人や社会、自然に直接関わる体験活動を重視すること○児童の発達や興味・関心を適切に把握すること○これまでの児童の考えとの「ずれ」や「隔たり」、理想と現実の対比などを大切にすること
情報の収集	<ul style="list-style-type: none">○体験を通じた感覚的な情報の収集を大切にすること○課題解決のために、目的をもって情報を収集すること○探究活動を深めるために、収集した情報を適切な方法で蓄積すること
整理・分析	<ul style="list-style-type: none">○どのような情報が、どの程度収集されているかを把握すること○どのような方法で情報の整理・分析を行うのかを決定すること○「比較して考える」、「分類して考える」、「序列化して考える」、「関連付けして考える」などの思考の関係を意識すること
まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none">○情報を再構築し、自分自身の考えや新たな課題を自覚すること○相手意識や目的意識を明確にすること○伝えるための具体的な方法を身に付け、内容を明らかにすること

『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』（文部科学省 平成 22 年 11 月）参照

(2) 協働的な学習の捉え方

「協働的な学習」とは、他者と共に課題を解決していく学習活動のことである。他者とは、共に学習を進めるグループだけでなく、学級全体や他の学級あるいは学校全体、地域の人々、専門家など、また価値を共有する仲間だけでなく異なる立場の人々をも含んでいる。「協働的な学習」とは、他者と互いに考えや意見を出し合い、見通しや計画を確かめ合いながら問題の解決や探究活動を行うことと捉えた。他者と交流することで対話的な学びが生まれ、双方向の交流によって質の高い学習活動になると考えた。

(3) 『『アクティブ・ラーニング』の視点を生かして』の捉え方

「アクティブ・ラーニング」とは、課題の発見、解決に向けた主体的・協働的な学びを実現するための学習法の一つである。また、児童が知っていることやできることを活用する上で必要となる資質・能力を身に付けるための具体的方策である。つまり、対話やプレゼンテーションといった活動レベルの問題ではなく、児童が自主的・自発的に活動すればよいというものでもない。児童の実態を踏まえて、それぞれの単元や学年で様々な資質・能力をどこまで伸ばしていくのかを考え、授業の工夫・改善を重ねていくことが求められる。そこで、研究主題設定の理由で述べた「アクティブ・ラーニング」の視点を生かして、実社会や実生活との関わりを重視した総合的な学習の時間の学習活動を行うことで、研究主題に迫ることができると考えた。

2 調査研究

(1) 調査のねらい

本研究部員の所属校で、教員対象と児童対象の二つの調査を行った。両調査とも、研究の視点をつかむことをねらいとした。教員対象の調査では、四つの学習過程のどの場面で指導に困難さを抱えているのか、また、児童対象の調査では児童の実態を把握するとともに、目指す児童像を明らかにすることにした。

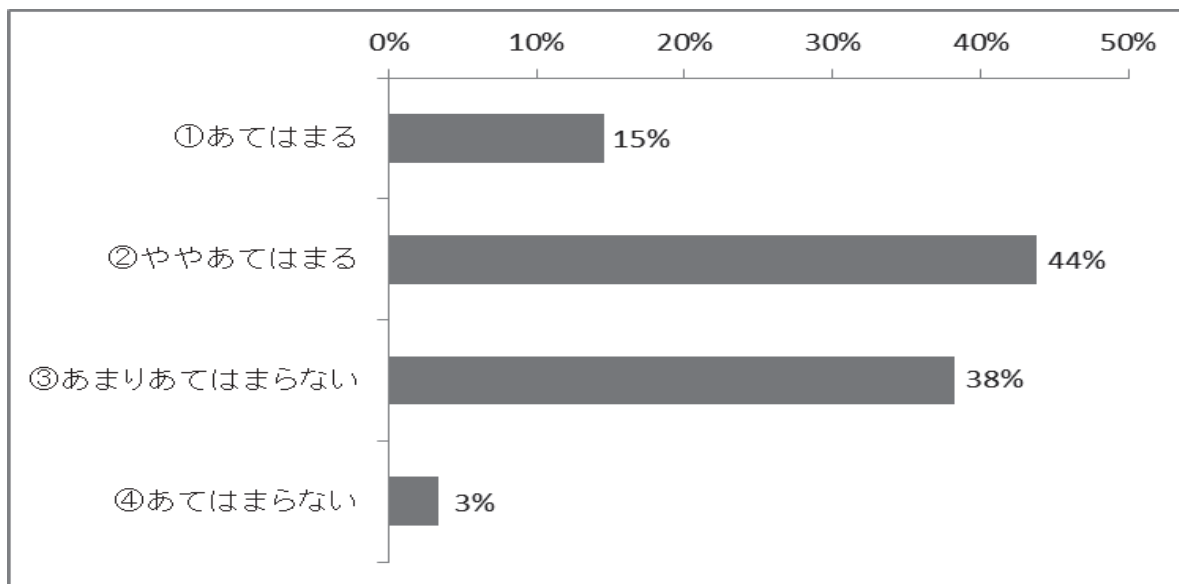
(2) 調査概要

	教員対象	児童対象
調査時期	平成 28 年 7 月	平成 28 年 7 月
調査対象	都内小学校 6 校の教員 (本研究部員所属校)	都内小学校 6 校の児童 (第 3～6 学年対象) (本研究部員所属校)
調査方法	質問紙法による選択枝法	質問紙法による選択枝法
サンプル数	95 名	1, 214 名

(3) 調査結果と考察

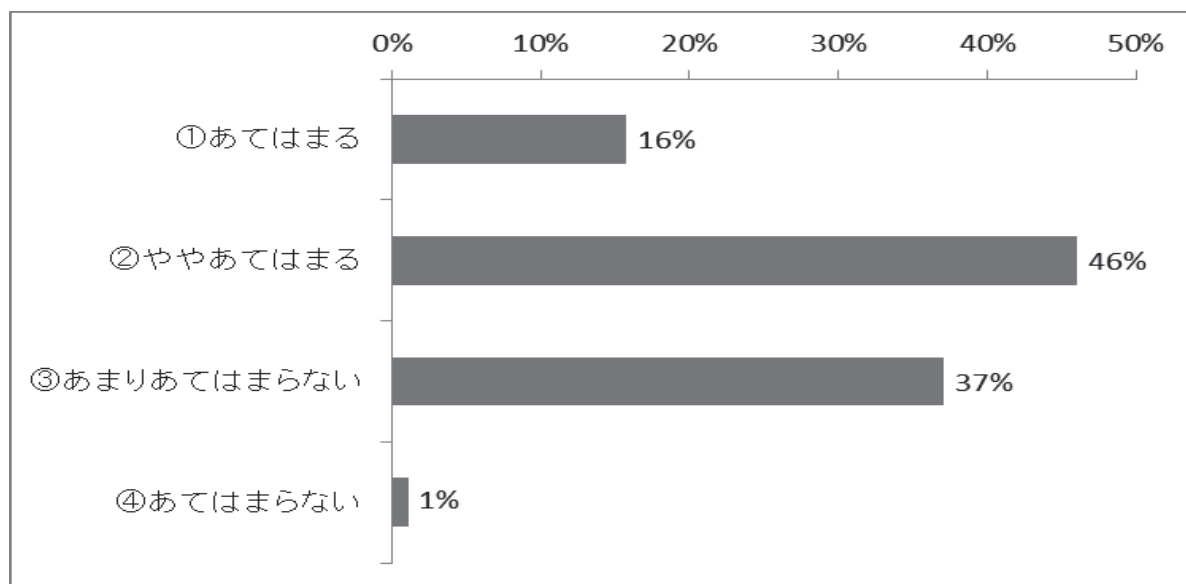
(教員対象)

【質問】 児童が課題を設定できるように、十分に時間をとっていますか。



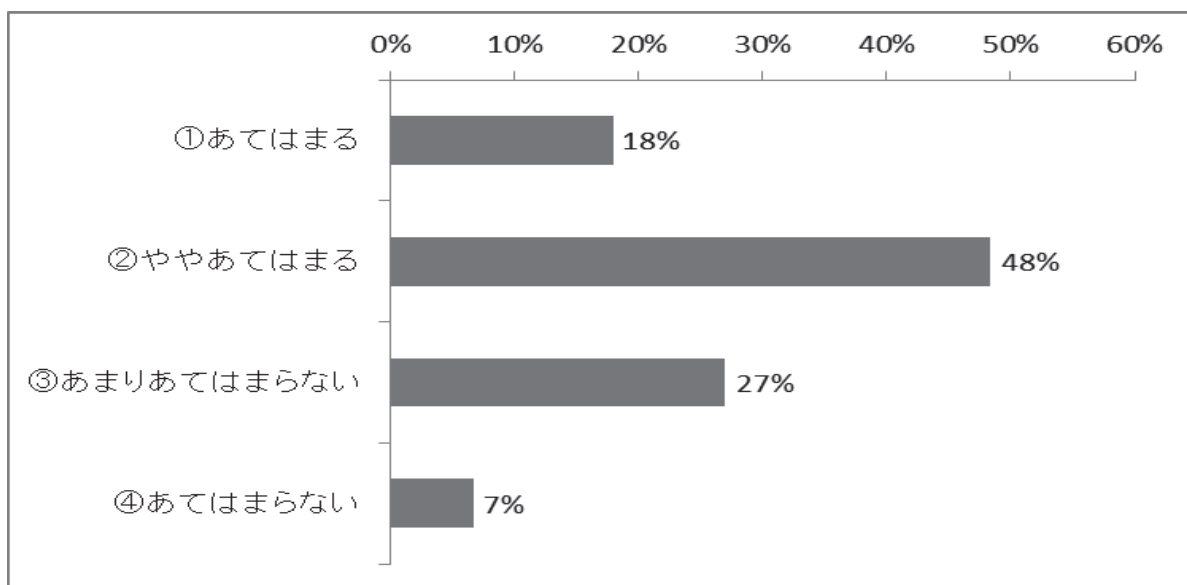
全体の59%が「あてはまる」・「ややあてはまる」と回答した。しかし、41%の教員が、児童が自ら課題を設定するための十分な時間をとれていないと回答した。

【質問】 指導計画、教材・教具を児童の実態に合わせて見直していますか。



「あてはまる」・「ややあてはまる」と答えた教員が62%いる反面、38%が「あまりあてはまらない」・「あてはまらない」と回答した。

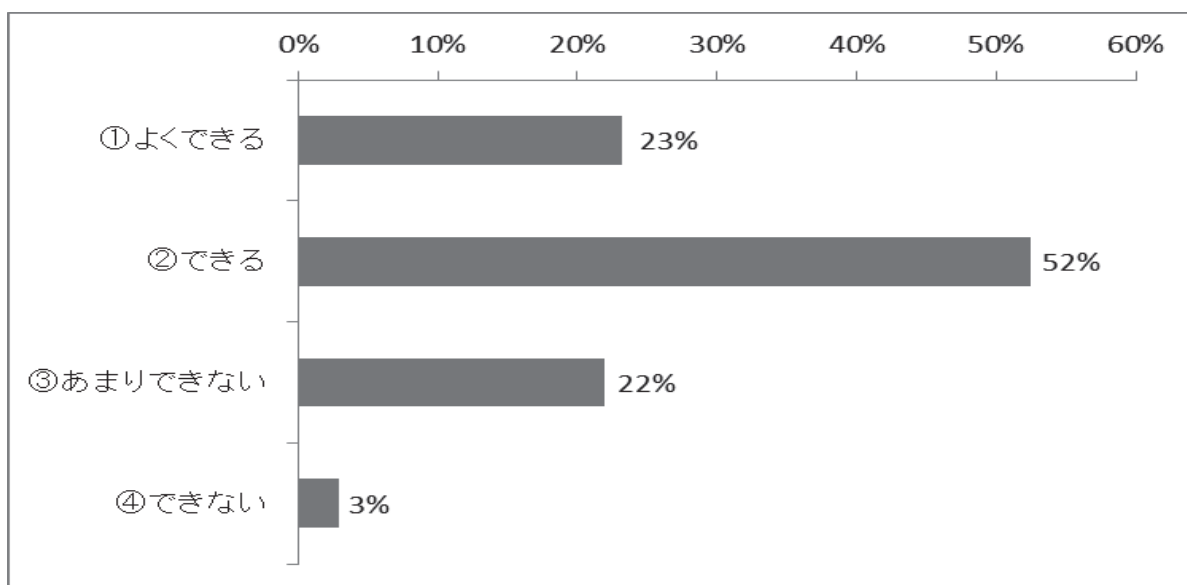
【質問】 外部人材（保護者・地域の方など）に協力を得て、授業を計画していますか。



全体の 66%が「あてはまる」・「ややあてはまる」と回答した。しかし、「あまりあてはまらない」・「あてはまらない」と答えた教員が 34%であった。

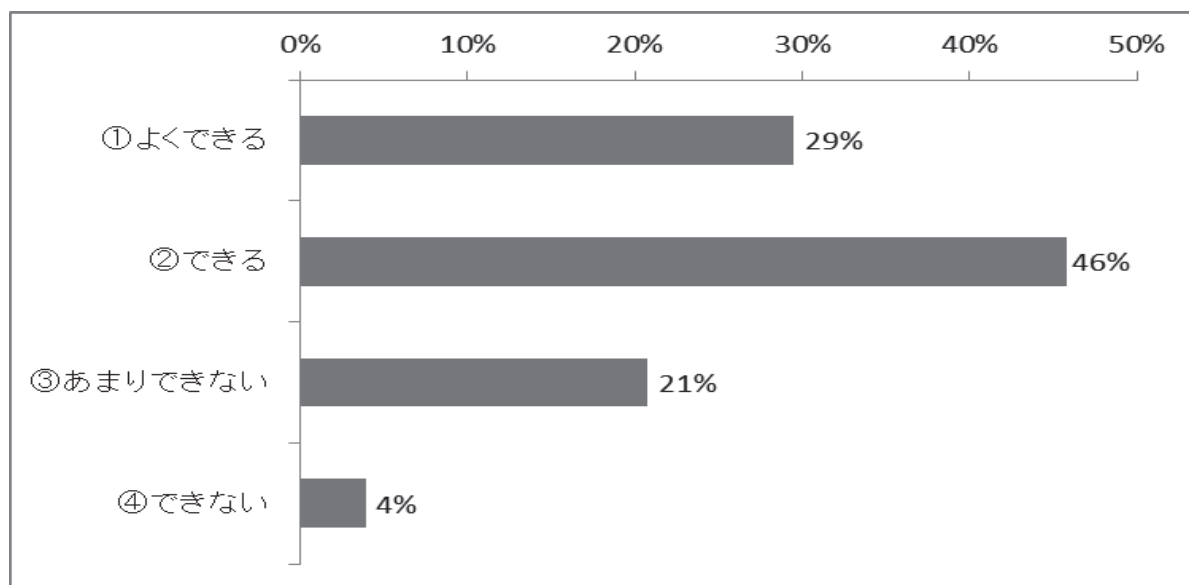
（児童対象）

【質問】 自分で課題を設定することはできますか。



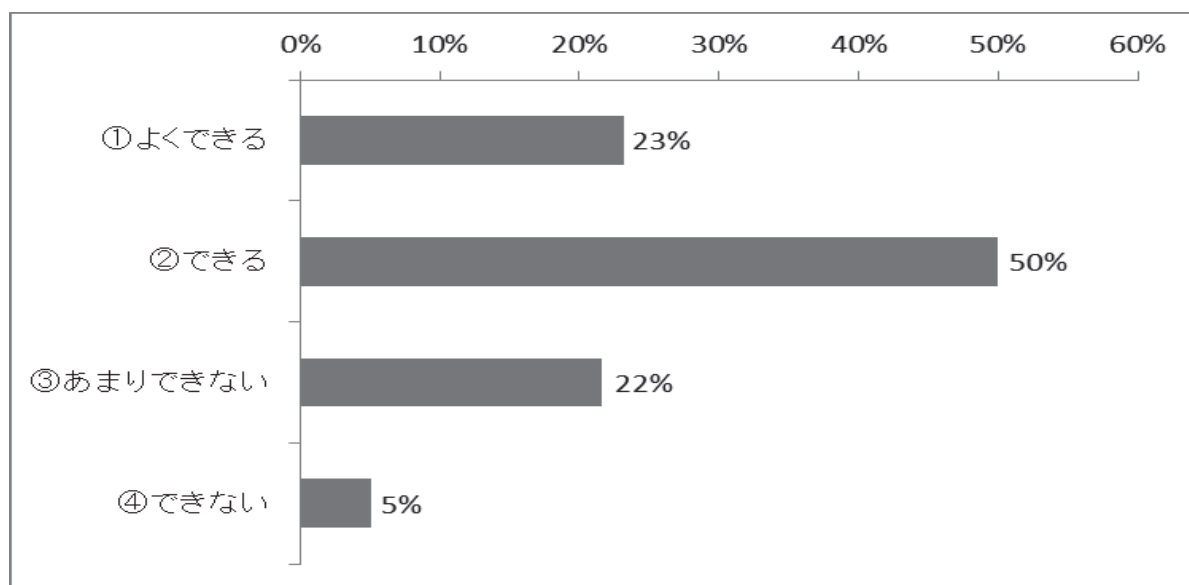
75%の児童が「よくできる」・「できる」と回答している反面、「あまりできない」・「できない」という児童も多く、25%いる。

【質問】 集めた情報を整理・分析することができますか。



75%の児童が「よくできる」・「できる」と回答している反面、25%の児童が「あまりできない」・「できない」と回答した。

【質問】 課題を解決する中で、問題にぶつかったとき、いろいろな解決方法を考えることができますか。



「あまりできない」・「できない」と答えた児童が27%いた。この質問項目は、児童対象の質問事項の中で、「あまりできない」・「できない」と答えた割合が一番多かった。

考察

「課題の設定」の場面では、教員、児童ともに難しさを感じていることが分かる。児童が自ら課題を設定し、毎時間の学習で課題意識をもって意欲的に探究する学習を、教員側が単元計画の中で十分に位置付けることができていないという実態もうかがえる。

また、「整理・分析」の場面では、多くの児童は集めた情報を整理・分析することができると考えている。しかし、約3割の児童が難しさを感じていることから、それらの児童に対してだけでなく、整理・分析ができていると肯定的な自己評価をした児童に対しても、総合的な学習の時間における整理・分析の方法を身に付けられるように指導していく必要がある。

外部人材の活用については、小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編にも必要性が示されているが、十分に活用できていないのが現状である。充実した学習活動を展開するには、地域の人々の協力を得るとともに、地域の教育資源などを積極的に活用することが望まれる。

児童の興味・関心や問題意識は、年度ごとに違いがある。児童の実態を踏まえ、実際の学習を進めていく中で、当初の単元指導計画を修正していくことになるが、児童の実態に応じた指導計画、教材・教具の見直しについては、約4割の教員が取り組めていない。年度初めはもちろんのこと、年度途中や単元の途中であっても、変更や改善を加えることが望まれる。ただし、変更等に際しては実現の見通しが十分にあるか、児童が意欲をもって追究できるものか、新しい学習活動に質的な高まりが得られそうかなど、前年度や当初の計画よりも質の高い学習が可能かどうかを見極める必要がある。

以上の調査研究を踏まえて目指す児童像を設定し、研究を行うことにした。

3 授業研究（研究主題に迫る手だて）

(1) 児童とつくる学習計画

「アクティブ・ラーニング」の視点を生かした探究的・協働的な指導計画にするためには、児童の関心や疑問を重視して適切に取り扱うことや、教員が意図した学習を効果的に生み出していくことが重要である。

本研究では、児童が興味や関心をもち毎時間見通しをもって粘り強く取り組めるよう、課題を設定した後に、教員が意図的に学習計画を立てる場面を設ける。そして、児童とゴールイメージを共有し、どのような活動が必要か考える。その際、児童が探究の学習過程を意識できるように留意する。児童がゴールイメージに向かって、「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」において、見通しをもって学習活動に取り組めるようにする。それとともに、一単位時間の学習の振り返りでは、次時の学習を考える場面を設定する。

(2) 他者との関わり

探究的・協働的な学習を達成するには、他者との関わりが欠かせない。他者と協働して学習活動を行うことには、現行の小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編にも示されているように三つの価値がある。そこで、それぞれの価値が探究的な学習においてどのような場面で発揮されるのかを整理した（表2）。

表2 各学習過程における他者との関わりによる価値との関連性

◎は特に価値が表れる学習過程であると捉えた

学習過程 \ 価値	多様な情報の収集ができる	異なる視点からの検討ができる	相手意識や仲間意識を向上できる
課題の設定	○	○	○
情報の収集	◎		○
整理・分析		◎	○
まとめ・表現		○	○

第一に、多様な情報の収集ができることである。同じ課題を追究する学習活動を行っていても、収集する情報は協働的な学習の方が多様であり、その量も多い。情報の多様さと多さは、その後の整理や分析を質的に高めるために必要である。特に「情報の収集」の学習過程において、この価値が見られるため、教員は十分に意識して指導する。

第二に、異なる視点からの検討ができることである。一面的な考え方や同じ思考の傾向の中では、情報の整理や分析も画一的になりやすい。異なる視点や考えを検討していくことで、事象に対する見方や考え方が深まり、学習活動を更に探究的な学習へと高めていくことができる。特に「整理・分析」の学習過程においてこの価値が見られるため、教員は十分に意識して指導する。

第三に、相手意識を生み出したり、学習活動のパートナーとしての仲間意識を高めたりできることである。一人でできないことも集団では実現可能となることが多い。また、地域の大人などとの交流は、児童の社会参画の意識を高めることにつながる。この価値は、どの学習過程でも見られるため、教員は常に意識して指導する。

上記を踏まえ、それぞれの価値が効果的に働くように、意図的・計画的に他者との関わりを単元指導計画に位置付けることで、協働的な学習の充実を図る。

(3) 思考ツールの活用

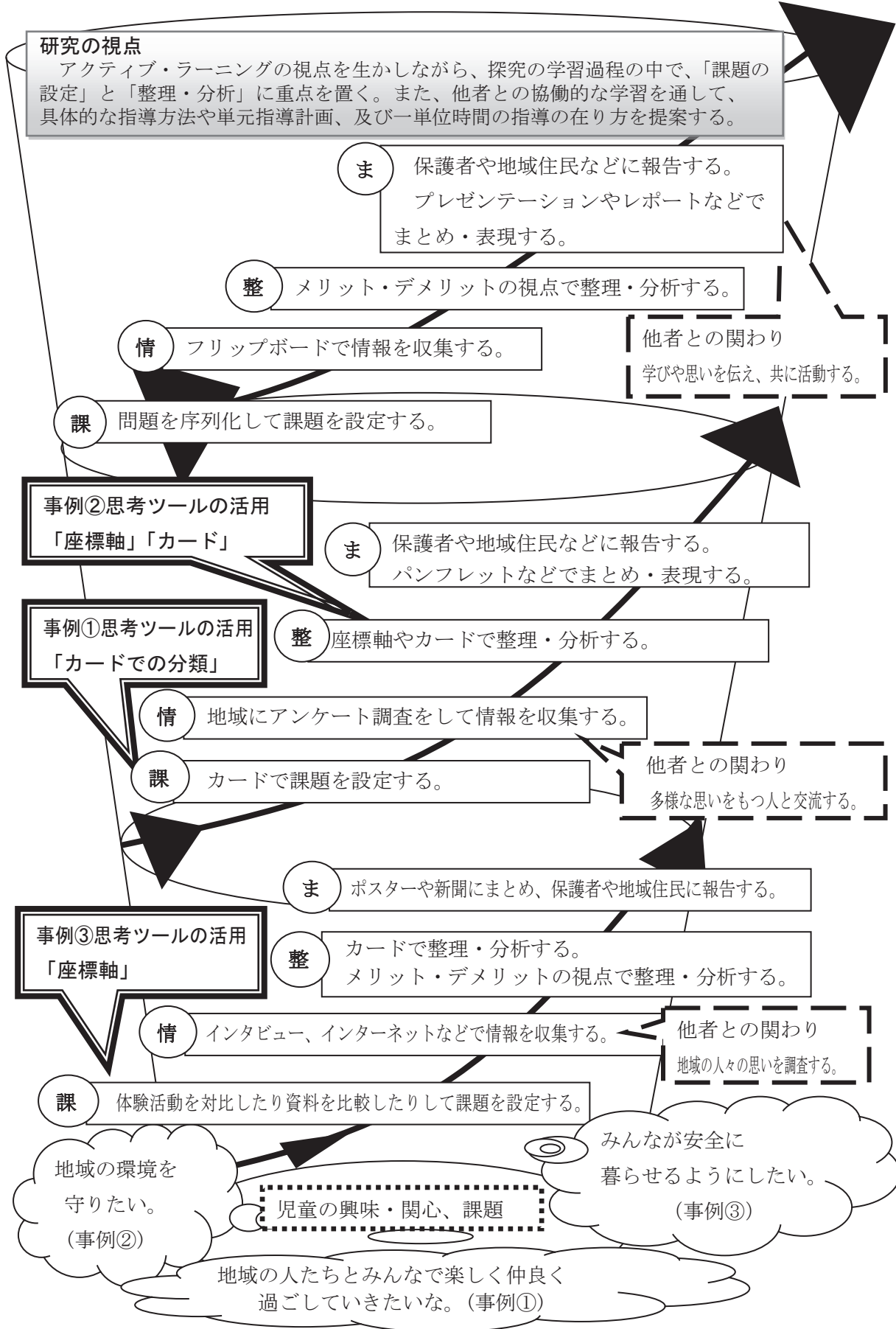
探究的・協働的に学ぶには、児童が自分自身の思考を広げ、児童同士が互いに学び合うことが大切である。そこで、本研究では、思考ツールの活用に着目した。思考ツールを活用することで、情報が可視化・操作化され、互いの考えが明らかになる。明らかになった考えを比較したり関連付けたりしていくことで、自己の考えを振り返り、再構築し、学びを深めていくと考える。そのためにも、教員が思考ツールの特徴を正しく理解し、発達段階に応じた効果的な活用を浸透させていくことが必要である。そこで、本研究部員が所属校において使用している国語科、算数科の教科書（国語科4社・算数科2社）に記載されている思考ツールを学年ごとに調べ、整理するとともに、育てられる力を明らかにした（表3）。児童の発達段階及び目的に応じて思考ツールを活用し、総合的な学習の時間における「課題の設定」、「整理・分析」の学習過程における学習の充実を図る。

表3 児童の発達段階及び目的に応じた思考ツールの活用と育てられる力の一覧表

学年	教科	思考ツール	育てられる力	ページ
第3学年	国語	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフで整理・分析する。(棒グラフ) ・カードで整理・分析する。 ・座標軸の入ったワークシートで整理・分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を焦点化し、整理する力 ・事象の特徴を客観的に捉えたり、事実関係を把握したりする力 ・自己の考えを振り返ったり他者の考えと比較したりする力 	*32 *31 *35
	算数	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフで整理・分析する。(棒グラフ) ・表で情報を分類・整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を焦点化し、整理する力 	*32 *34
第4学年	国語	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を比較して課題を設定する。 ・集めた情報をランキング付けして整理・分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料などの違いなどから問題点を共有化し課題を明らかにする力 ・集めた情報を整理し、根拠を明らかにして考え、表現する力 	*21 *37
	算数	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフの推移を予想して課題を設定する。 ・グラフで整理・分析する。(折れ線グラフ) ・二次元表を作成し、資料から分かることをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査対象の今後を予測したり、問題点を見いだしたりする力 ・情報を焦点化し、整理する力 ・調査した事柄を整理する力 	*32 *32 *35
第5学年	国語	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェビングマップで、イメージを広げて課題を設定する。 ・カードで課題を広げる。 ・カードで整理・分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマを多面的に捉えたり、細分化して、具体的に捉えたりする力 ・気付きや疑問を類型化し、課題を見いだす力 ・事象の特徴を客観的に捉えたり、事実関係を把握したりする力 	*33 *22 *31
	算数	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフで整理・分析する。(円グラフ・棒グラフ・折れ線グラフ) ・カードで整理・分析する。 ・ベン図を使って共通事項を整理し、視覚的に捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を焦点化し、整理する力 ・事象の特徴を客観的に捉えたり、事実関係を把握したりする力 ・共通点や相違点を明らかにする力 	*32 *31 *36
第6学年	国語	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を比較して課題を設定する。 ・問題を序列化して課題を設定する。 ・ベン図で整理・分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・原因を類推し、課題を明らかにする力 ・問題を焦点化し、追究したい課題を見いだす力 ・共通点や相違点を明らかにする力 	*21 *23 *36
	算数	<ul style="list-style-type: none"> ・表や様々なグラフ(柱状グラフや円グラフ)に整理し、資料の特徴を読み取り、傾向などをつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査対象の今後を予測したり、問題点を見いだしたりする力 	*32

*『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』(文部科学省)のページ番号

4 実践事例の単元イメージ



5 実践事例

実践事例1 学習対象を「障害（視覚障害）のある人との交流」とした実践例（第4学年）

1 単元名 「ともに生きる ―やさしい町にするために―」

2 単元目標と評価

(1) 単元の目標

障害のある人との交流を通して、障害について理解を深め、障害のある人と共に生きていくために自分たちにできることを考え、実践していくことができる。

(2) 評価規準

評価の観点	学習方法				他者や社会	自分自身
	課題設定力（課）	情報収集力（情）	整理・分析力（整）	表現力（表）	関わる力（関）	自己を見つめる力（自）
単元の評価規準	(1) これから自分たちがどんな学習活動ができるか、(自分の) 課題を見付ける。	(1) 障害のある人について、調べている。	(1) 調べた障害についての情報を整理している。	(1) 障害のある人のために自分たちができることを考え、発信していこうとする。	(1) 友達と協力したり、ゲストティーチャーの話を聞いたりしながら、学習を進めている。	(1) 自分の生活を振り返り、自分に何ができるか考えている。
	(2) 自分たちの町を見直し、障害のある人にもやさしい町にするために、何をすればよいか、課題を設定している。	(2) 地域のバリアフリーについて調べている。	(2) バリアフリーや点字ブロックについて、情報を整理している。	(2) やさしい町にするために、自分たちがすることを地域の人に伝える。	(2) 友達と協力して、地域のバリアフリーや点字ブロックについての調査を行っている。	(2) 障害のある人と共に生きていくために、自分はどうすればよいかを考えている。

3 研究主題に迫るための手だて

(1) 児童とつくる学習計画

リオデジャネイロ・パラリンピック競技大会があり、障害のある人を目にする機会が多くなったが、実際に障害のある人に触れ合ったことがある児童は少ない。児童の障害のある人たちへの理解が段階的に深まっていくように、学習に対する見通しをもてるようにしながら「次の活動はどうするか」と常に問いかけ、学習活動を児童と考えていく。

(2) 他者との関わり

計画的に障害のある人とそれを支える人との出会いの場を設定し、思いや願いを直接聞くことで自分なりの疑問をもち、自ら課題を見付けられるようにする。

(3) 思考ツールの活用

思考ツール（カード、ランキングなど）を活用することで個々の考えを共有し、障害のある人のためにどのようなことができるかという学習活動の共通性が分かりやすくなり、次の学習を選択しやすくなる。

4 単元指導計画【全 25 時間】

	探究	主な学習活動（時間数）・児童の発言	○教師の支援☆主題に迫るための手だて	評価規準
自分たちができることをしてやさしい町にしよう⑭	課	<p>1 身の周りの生活の中には、多様なユニバーサルデザインが存在し、生活する人たちのためにあることを知る。①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バスやスロープなど地域にあるものも実はユニバーサルデザインなのだ。他にどんなものがあるのだろう。 <p>2 社会福祉協議会（以下社協）の方を招き、社協の活動やユニバーサルデザインについて理解を深める。①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社協の方は、みんなのための仕事をしているのだな。 ・ユニバーサルデザインは、町のどんなところにあるのだろう。 <p>3 障害のある人との交流を通して、障害について理解し、共に生きるために学習したいことや、取り組んでいきたいことを話し合う。①（本時 4 / 25）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域のユニバーサルデザインを調べてみたい。 ・地域の人たちはユニバーサルデザインを知っているのかな。調査してもいいな。 	<p>○いくつかのユニバーサルデザインを例に挙げ、目的や役割など理解を深められるようにする。</p> <p>○どんなユニバーサルデザインがあるとういかに考えていけるようにする。</p> <p>☆社協との交流を通して、ユニバーサルデザインについての理解を深めるとともに、社協の協力体制が取れるようにしていく。</p> <p>☆これからできる活動をカードに記述し、互いの考えを交流できるようにする。</p> <p>☆課題に合わせて、社協の方と連携してゲストティーチャーの調整を行う。</p>	<p>課(1)</p> <p>関(1)</p> <p>自(1)</p>
	情	<p>4 障害のある人の思いや願い、地域のユニバーサルデザインについて調べる。②</p> <p>5 実際にアイマスク体験をしたり、視覚障害の人の話を聞いたり、ボランティアをしている方から援助の仕方を調べる。②</p> <p>車椅子体験をする。②</p> <p>地域に出てバリアフリーを調べる。②</p>	<p>○アイマスク体験と視覚障害の人の話を聞き、視覚障害の人の前向きな生き方に触れるように時間設定を行う。</p> <p>○視覚障害の人と一緒に来るボランティアの人からも話を聞き、具体的な援助の方法も聞き、視覚障害の人に対しての情報を児童が得られるようにする。</p> <p>○車いす体験が安全にできるように、配慮</p>	<p>情(1)</p> <p>関(1)</p>
	整	<p>6 体験活動をまとめ、友達と意見交流する。①</p> <p>地域の人々や保護者に学習したことをどのように伝えるか話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の人々や保護者に体験してもらおうといいよ。体験することで障害のある人の気持ちも分かると思う。 ・ユニバーサルデザインやバリアフリーなど、町のすてきなところも伝えていきたいね。 	<p>する。</p> <p>☆社協の方を招き、車いす体験をするときの注意を話してもらおう。</p> <p>○地域ごとのグループに分かれて、バリアフリーの情報を整理する。</p>	<p>整(1)</p>
	表	<p>7 学校公開で学習してきたことを発表する。②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の学習について伝えることができてうれしい。 	<p>○地域の人や保護者に児童の活動に対するアンケートを行うことで、今後の活動に役立てるようにする。</p>	<p>表(1)</p> <p>自(1)</p>

もっとやさしい町にするために①	課	1 地域に住む人々にとってやさしい町にするために どんなことをすればよいか話し合う。② ・地域の人たちは、町のよさをどう捉えているの だろう。 ・地域の人たちに調査してみたいな。	○ランキングを活用し、これからの活動を 具体的に考えていけるようにする。	課(2)
	情	2 地域の人々に町のよさについてインタビューす る。② ・地域の人たちは町のよさを、○○と考えているの かな。 3 地域に出て、バリアフリーを調べる。②校外活動	○地域に出る場合はインタビューの仕方を 指導し、調査が円滑に行えるようにする。 ○校外学習で地域に行って、調べる視点を 明確にする。 ○校外学習が安全に行えるように配慮する。	情(2) 関(2)
	整	4 自分の思いや地域の思いをもとに町のよさについ て話し合う。②	○もっとやさしい町になるように、自分た ちの思いや地域の思いをもとにして地域 へ提案できるようにする。	整(2) 関(2)
	表	5 もっとやさしい町にするために自分たちの思いを 地域の人々に伝える。③		表(2) 自(2)

5 本時の展開（学習計画を立てる場面）

本時（全 25 時間中第 4 時間目）

(1) 本時の目標

障害のある人と共に生きるために、自分たちにできることを考え、学習計画を立てることができる。

時間	○学習活動・学習内容	◇指導上の留意点 ☆評価規準（評価方法）
導 入	○前時までの活動を振り返る。 障害のある人と共に生きるために、学習したいことを話し合う。	
展 開	○これから学級で取り組む活動を話し合う。 ・ユニバーサルデザインについて調べたい。 ・障害のある人のことをもっと知りたい。 ・自分たちも視覚障害の人の気持ちが分かるようになりたい。 ・ユニバーサルデザインは、地域のどのようなどころにあるのだろう。 ・地域のユニバーサルデザインを調べてみたい。 ・地域の人たちは、ユニバーサルデザインを知っているのか聞いてみたい。	◇カードを活用して、一人一人の児童がどんな活動ができるかを考え、グループ活動が活発になるようにする。 ◇グループでこれから学習していくことを話し合う。 ◇グループで考えた活動について学級全体で話し合う。 ◇カードを活用し、自分たちが学習していきたい活動について話し合えるようにする。また、必要に応じて、児童の考えが具体的な活動になるように助言する。 ◇カードを活用し、児童の考えを板書に掲示していく。考えを関連付け、細分化しながら、思考を深められるようにする。 ☆今までの活動を基に、自分たちにできる活動について考えることができる。（発言・カード）
ま と め	○振り返りをノートに書く。	◇次時の活動に対する見通しをもつ。

6 考察

(1) 児童とつくる学習計画

障害のある人と共に生きるために学習したいことを考えたときに、障害のある人に大変なことや辛いことは何か聞いてみたいと考えた児童が多くいた。

学級の話合いの中で、「障害のある人に話を聞くだけでなく、自分たちが実際に体験することができれば、もっと障害のある人の気持ちが分かると思う。」という意見が出た。その意見がきっかけとなり、児童の中に障害のある人の気持ちを知るための方法として体験活動を学習計画の中に取り入れる児童が増えた。

このように児童と学習計画をつくることによって、児童が活動の必要性や目的を理解し、主体的に体験活動に取り組むことができた。

(2) 他者との関わり

児童の関心や問題意識をもたせていくことを目指し、外部人材として、障害のある人や障害のある人をサポートする人との交流の場を設定した。

児童が障害のある人に対してもっている気持ちは、「かわいそうだ」、「大変そうだ」といったネガティブなイメージが多かった。視覚障害者の方の話を聞き、児童は「視覚障害者の方の生活は、大変なことばかりではないことを知りました。」など、直接、障害のある人と交流する場を設定することで考えも変わっていった。

児童は、障害を乗り越えて明るく生きている人の生き方に触れることで、それまで抱いていた視覚障害者に対するイメージが変化し、身近に感じるようになった。「視覚障害者の方にどう接すればよいか少し分かった。その人たちのための道具もあってすごいと思った。でも、道具を使うのではなく自分が困っている人にとっての支えになりたいと思う。」という児童の気持ちの変化によって、共に助け合って生きていくという考えをもつことができ、児童が自分たちに行えることは何か、より真剣に考えるきっかけになった。

(3) 思考ツールの活用

児童がこれからどんな学習活動を行うか考えた。「地域のユニバーサルデザインを調べてみたい。」、「実際にアイマスク体験をしてみたい。」、「視覚障害のある人に話を聞きたい。」といった多様な意見をカードで分類することで、これからの活動を明らかにすることができた。また、カードを用いることで、自分の考えにはなかった異なる考えに気づき、様々な考えを知ることができた。

さらに、障害者を理解するにはどんな活動が有効かという視点を与えたことで、児童自身が必要な活動を選択することに役立った。

実践事例2 学習対象を「身の回りの環境」とした実践例（第5学年）

1 単元名 「松江小かがやきエコプロジェクト」

2 単元の目標と評価

(1) 単元の目標

地域や学校の環境について自分が取り組むべき課題について調べることを通して、他者と協働して持続可能な社会の実現に向けて環境を守ることを考え、実行しようとするができる。

(2) 評価規準

評価の観点	学習方法				他者や社会	自分自身
	課題設定力（課）	情報収集力（情）	整理・分析力（整）	表現力（表）	関わる力（関）	自己を見つめる力（自）
単元の評価規準	(1) K J 法的手法などを使って、エコ活動の視点から省エネ設備を調べるための課題を設定している。	(1) 自校の省エネと設備についてのつながりを見いだしながら、情報を収集している。	(1) 省エネと設備のつながりがあるという視点に合った、情報を整理している。	(1) 省エネ設備と環境問題の視点から調べたことをまとめ、保護者や友達に伝えている。	(1) 友達と協力したり、校内の先生方から話を聞いたりしながら学習を進めている。	(1) 省エネ設備調べを通して活動してきたことを振り返り、エコ活動に対する自己の考えの変容に気付いている。
	(2) 地域のために何ができるかを考え、課題を設定している。	(2) エコ活動について様々な手段で調べて情報を収集している。	(2) 情報を比較したり関連付けたりしながら整理している。	(2) 学校でできる省エネ活動を実践し、交流している。	(2) 調べたことを協力してまとめ、松江小のエコ活動について話し合っている。	(2) 学校でできる省エネ活動を考えている。
	(3) 地域の環境を守るための、課題を設定している。	(3) 地域の環境についての情報を集めている。	(3) 地域の環境を守っていくために伝えるべきものを整理し、分析している。	(3) 地域の方に分かりやすく伝えられるように表現している。	(3) 地域の一員であることを実感し、地域住民の一人として環境を守っていこうとしている。	(3) 学習を振り返り、これからの生活に生かそうとしている。

3 研究主題に迫るための手だて

(1) 児童とつくる学習計画

学級の課題解決に向け、学級全体で各学習過程の初めに内容と方法を出し合っって学習計画を立てるようにする。その計画に沿って、各グループに合った内容を決めて活動を行うことで、向かうべき方向が明確になり、個人の考えも生かすことができると考える。

(2) 他者との関わり

児童が活動の意義を見いだせるように、えどがわエコセンターの方々を招き、江戸川区の環境問題について話をしてもらったり、児童からの質問に答えてもらったりする時間を設定する。また、松江図書館とも連携して図書資料を借りたり、地域の方と関わる意識を高めたりして、学校外の他者との関わりをもてるようにする。

(3) 思考ツールの活用

共通点や相違点を明らかにするための「ベン図」、よさや課題を明確にするための「メリット・デメリット」、集めた情報を分析するための「座標軸」などの思考ツールの特徴を理解して活用することで、児童の思考が深まるようにする。

4 学習計画 全 63 時間 ※江戸川区では7時間を読書科として扱っている。

	探究	主な学習活動（時間数）・児童の発言	○教師の支援☆主題に迫るための手だて	評価規準
松江小のエコを調べよう⑳	課	1 エコスクールである松江小学校の設備を調べ、課題を設定し、学習計画を立てる。 ⑤	○児童が学校設備を通して、省エネについて考えるような課題を設定する。 ☆第6学年の児童に昨年度の学習についてインタビューをする。	課(1)
	情	2 関心をもった設備がエコ活動とどのようにつながっているのかを調べ、情報を集める。⑤	☆「エコスクール」について副校長先生から話を聞く。	情(1) 関(1)
	整	3 集めた情報を分析し、広めたい内容を決める。②	○全員の考えが視覚的に捉えられるように思考ツールを活用して課題を設定したり、まとめたりする。(カード、座標軸)	整(1)
	表	4 調べたことをまとめ、友達同士でアドバイスをし合い、学年の友達や保護者に発表する。⑧	☆保護者の方にも協力してもらい、夏休み中に省エネ活動に取り組む。	表(1) 自(1)
身近なエコを調べて実行しよう㉓	課	1 エコセンターの方から地域の環境問題について聞き、課題を設定し、学習計画を立てる。④	○課題設定に向けた共通体験を通して、エコセンターの方と夏休みの省エネ活動の振り返りをし、江戸川区の環境問題について話を聞く。	課(2)
	情	2 それぞれのエコ活動の必要性、身近な地域の実態について調べる。⑥ ・エコ活動の意味を理解して伝えたい。 ・未来に向けて何ができるか考えよう。 ・エコ活動に対する関心が見えてきた。	☆カードを使って学級の課題設定をし、学級の活動計画を立てる。 ☆身近なところで取り組まれているエコ活動を調べるために、家庭や地域の方々へのインタビューやアンケート調査、放課後を活用したフィールドワークを取り入れる。	情(2) 関(2)
	整	3 これまで調べてきたエコ活動の必要性や実態調査を整理・分析し、広げるべきエコ活動を考える。③（本時 33/63） ・集めた情報の中から実践するエコ活動を決めよう。	☆集めた情報は整理・分析を効率的に行うためにカードにまとめておく。	整(2)
	表	4 学級で決めたエコ活動を実行する。⑩ ・自分たちがまずエコ活動に取り組み、感じたことも伝えよう。 5 身近な校内の人達に、学級で決めた取組と成果を発表する。	○思考を目的に合わせて深められるよう、思考ツールを選択して活用することを助言する。 ☆発表に説得力が出るように、整理・分析した情報の中から実践するエコ活動を決めて取り組む。 ○身近な校内の人達に、協力を呼び掛けるようにする。	表(2) 自(2)
	課	1 もっと多くの人に協力してもらおう方法について考え、課題を設定し、学習計画を立てる。③	☆地域に目を向け、エコ活動に取り組んでいる会社や区の方々に、連絡を取る。	課(3)

松江の未来を考えよう⑳	情	2 地域や区の環境問題について情報を集める。⑥	☆児童の発表に向け、エコセンターの方々や地区会長さんに連絡を取っておく。 ○「未来宣言」をする対象を決めてから、課題を設定するように声を掛ける。 ○相手意識・目的意識をもって表現方法を設定するように声を掛ける。 ☆環境について学んだことを振り返り、自己の生き方について考える。	情(3) 関(3)
	整	3 問題を整理しながら解決策を考える。④		整(3)
	表	4 これまでの学習を振り返り、自分の考えをまとめ、未来宣言をする。⑦		表(3) 自(3)

5 本時の展開 (全 63 時間中第 33 時間目)

(1) 本時の目標

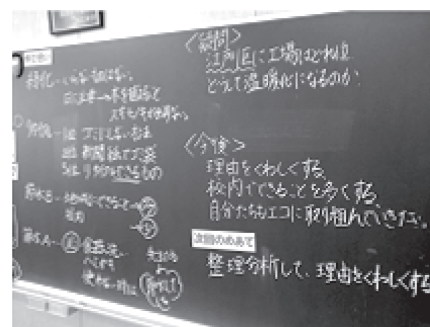
学校・地域の人々に広めるエコ活動の情報を整理することができる。

時間	○学習活動・学習内容	◇指導上の留意点 ☆評価規準(評価方法)
導入	○今日のためてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 学校・地域の人々に広めるエコ活動の情報を整理しよう </div>	◇エコ活動を実践していくために集めてきた情報を「どのような情報が」「どれ位」集まっているか把握するために、一度整理してみようという目標をもてるようにする。
	○情報を整理する時に気を付けることや方法について考える。 ・目的を決めて分けた方がいい。 ・地域と学校とは分けて考えるか、一緒にするか。 ・実践できるか、実践できないかも重要だね。	◇①学校に広める必要がある②地域に広める必要がある③どちらも必要ある、の三つの視点を出すようにする。 ◇児童が目的を達成できる思考ツールを選べるようにするために、事前に整理・分析の方法をまとめたものを資料として配布しておく。(座標軸・ランキング・ベン図・「今、求められる総合的な学習の時間」より)
展開	○グループごとに思考ツールを選択し、集めた情報を整理する。 ・地域でも学校でも必要なエコ活動は同じだね。 ・地域でできても、家庭ではできないこともあるかもしれない。 ・実態を見ると、地域で実践するなら身近にできることがいいね。 ○整理して分かったことを報告し合い、他のグループの報告内容を自分のグループに報告する。 ・エコ活動の関心は高いけれど節電や節水をやっていない人が多い。実践していく必要がある。 ・地域の実態に合わせた情報が足りない。 ・もっと身近な課題を探し、必要な情報を集めたい。	◇思考ツールを自分たちで選択して話し合えるようにホワイトボードを配布する。 ◇実践するエコ活動について話し合いが進むように、思考ツールや話し合いに対する助言をする。 ☆理由を明らかにしながら、取り組むエコ活動を選択し、情報を整理している。(ワークシート・発言) ◇相手の発表を聞いた人は、最後に自分たちのグループとの共通点(黄の付箋)、質問や疑問(青色の付箋)を書いて発表者に渡すようにする。 ◇自分のグループに戻ったら、他のグループとの共通点や気付いたことを話し合い、これからの活動について考えるように声を掛ける。
まとめ	○次時の活動に対する見通しをもつ。 ○プロジェクト日記を書いて、振り返りをする。	◇次時は、「整理した情報から足りない情報を集める」、または、「実践していくエコ活動を決めていく」という考えを引き出す。

6 考察

(1) 児童とつくる学習計画

学級の課題を設定した後に、「身近な人たちがエコ活動をしている」というゴールイメージをもつことで、各学習過程で自分たちが何をすべきかを明確にすることができた。「情報の収集」では、エコ活動をしてもらうためには、なぜエコ活動が大切なのかを調べて伝えることが大切であるという考えが生まれた。そのために、①エコ活動の大切さ、②エコ活動のメリット・デメリット、③デメリットの解決策を調べるという計画を立てた。



また、身近な人たちが環境に対してどのような意識をもっているのかという実態を調査することが必要と考えた。児童自らが立てる学習計画に、身近な人たちとの関わりを位置付けることができた。

(2) 他者との関わり

「課題の設定」の段階で、校内の設備に詳しい教職員や、外部人材である江戸川区の環境問題に詳しいエコセンターの方との出会いを設定した。エコセンターの方から環境問題について詳しいことを知り得た児童は、「情報の収集」の学習過程で分からないことや詳しく知りたいことに出合ったときに、自ら電話で連絡を取ったり、教員を介したメールのやり取りをしたりし、価値の高い情報を得ることができた。

また、「整理・分析」の学習過程で調べたことを整理・分析し、グループ同士で交流する時間を設定したことで、「自分たちが調べたことは、地球温暖化の原因や影響が多かったので、世界についてももっと調べた方がよいのではないかと思った。」「みんなに伝えてみると内容が分かりづらいことに気付いた。もっと分かりやすくなるようにもう一度調べる。」など、児童同士が学び合うことで事象への多様な見方を養い、自己の考えを深める姿が十分に見られた。

(3) 思考ツールの活用

個々の考えを最大限に生かし、協働的に学び合うために思考ツールは有効であった。「課題の設定」の学習過程では、児童一人一人のイメージや考えを出し合い、整理していくことが必要である。その際、カードやイメージマップが有効であった。「整理・分析」の学習過程では、それまでに集めた多くの情報を学級共通のめあてに合わせて整理することができると思う思考ツールをグループごとに選択して活用した。児童は一単位時間の中で、座標軸で分類したものをランキング付けして分析したり、カードで仲間分けしたものをベン図でさらに分析したりする姿が見られた。

思考ツールには各々に目的と特徴がある。これからも他教科とも関連を図りながら、思考ツールを活用して考えを広げたり深めたりする中で協働的に学ぶ姿を引き出していきたい。

実践事例3 学習対象を「防災のための安全な町づくりとその取組」とした実践例（第6学年）

1 単元名 「防災、その時に備えて」

2 単元目標と評価

(1) 単元の目標

自分たちの住む地域を防災・減災の視点で見つめることを通して、今後起こりうる災害に対してどのようなことができるのかを考え、実践しようとする態度を養う。

(2) 評価規準

評価の観点	学習方法				他者や社会	自分自身
	課題設定力（課）	情報収集力（情）	整理・分析力（整）	表現力（表）	関わる力（関）	自己を見つめる力（自）
単元の評価規準	(1) 防災と地域性を合わせて考えた、課題を設定している。	(1) 地域の特性に合った情報を調べている。	(1) 地域の特性に合った情報を整理している。	(1) 地域の現状と防災の視点からまとめ、伝えている。	(1) 消防団の方から話を聞いたりしながら学習を進めている。	(1) 今までの生活や地域に関わる学習を振り返っている。
	(2) 災害に備えるための大切なことについて、課題を設定している。	(2) 手段を選択し、必要な情報を収集している。	(2) 災害前と災害時と災害後に分けて、情報を整理している。	(2) 家庭や学校でできることを実践し、交流している。	(2) 友達と協力したり、防災部の方から話を聞いたりしながら学習を進めている。	(2) 家庭や学校でできることを考えている。
	(3) 防災への関心や意識を広げ、高めるための課題を設定している。	(3) 伝える相手を意識した情報を調べている。	(3) 防災について、自分が伝えたと思うものを考えている。	(3) 相手や目的に応じて、分かりやすくまとめ表現している。	(3) 地域の一員であることを実感し、地域を大切にしようとしている。	(3) 学習を振り返り、これからの生活に生かそうとしている。

3 研究主題に迫るための手だて

(1) 児童とつくる学習計画

「課題の設定」の場面では共通体験を通して、自分たちの住む地域を巡ったり、移動教室で市内巡りを行った静岡県下田市と比較したりすることで、地域について客観的に考えることができるようにした。また、その課題を解決するための学習計画を主体的に立てられるようにした。

(2) 他者との関わり

消防団や中学校の防災部等の外部人材を積極的に活用する中で問題解決に励み、「災害が起きたときにはしっかりと自分の身を守る。」「災害に遭ったときには、助け合っていく。」など、自助・共助の観点で自己の生き方を考えていけるようにした。

(3) 思考ツールの活用

様々な学習過程で座標軸やイメージマップなどの思考ツールを用いることで、意図的に他者と関わりながら学習を進めていく場面を多く設定した。

4 単元指導計画【全 30 時間】

	探究	主な学習活動（時間数）・児童の発言	○教師の支援☆主題に迫るための手だて	評価規準
地域を防災の視点で見直そう⑨	課	1 自分たちの住む地域を改めて見て回ったり、他の地域と比較したりする中でよさを再認識する。また、その地域で大地震が起きたときにはどのような被害が発生するかを考え、課題を設定し学習計画を立てる。⑤ (本時 4 / 30)	○今まで学習してきたことや、普段の生活をしている中で感じていることから考えたり、静岡県下田市と比較したりしながら地域の特性について着目できるようにする。 ○地域の災害時の危険度データを提示することで地域の防災について関心をもてるようにする。	課(1) 関(1) 自(1)
	情	2 地域の特性について、必要な情報を本やインターネットで調べたり、消防団の方の話を聞いてりして調べる。②	☆座標軸の入ったワークシートを用いて、課題を設定できるようにする。 ☆消防団の方を招き、地域の特性や想定される被害状況について話してもらうことで地域の防災について調べる意欲がもてるようにする。	情(1) 関(1)
	整	3 調べたことから地域（荒川区・学区）の現状と自分が感じたことを防災の視点で整理する。①	○必要な情報を調べられない場合は、区のホームページを活用するように伝える。	整(1)
	表	4 グループごとに整理したことをまとめて全体の場で発表する。①	☆調べた情報をマップに整理し、地域の特徴を捉えることができるようにする。 ○話し合った内容を電子黒板に映し、全体に伝わりやすくする。	表(1) 自(1)
災害に備えよう⑩	課	1 地域の課題をもとに災害に備えて、自分たちができる活動を話し合い、学習計画を立てる。②	○災害前、災害時、災害後について考えられるようにする。また、いつ起こるか分からないのが、災害であることを確認する。	課(2)
	情	2 必要な情報を本やインターネットで調べ、情報を集める。② 3 中学校の防災部の人から活動内容や、災害への備えについて話を聞く。①	○課題に合わせて司書教諭と連携し、資料を十分に準備する。 ☆中学校の防災部を招き、活動内容や心構えについて話をしてもらう。	情(2) 関(2)
	整	4 災害への備えについて、グループごとに、情報を整理し、自分たちができることを見付ける。③	○場面ごとのグループに分かれて、情報を整理する。 ○保護者の理解と協力を得る。	整(2) 関(2)
	表	5 実際に家庭や学校でできることを実行して、その活動内容を交流してまとめる。②		表(2) 自(2)
広げよう防災の心⑪	課	1 前小単元の振り返りをもとに、地域の人に伝え、実行してもらいたいことを考え、課題を更新し、学習計画を立てる。②	○自助と共助の大切さを確認する。 ○保護者や地域に対してアンケートを実施するなどして、地域の人々の防災に関する知識や意識について知ることで、有益な情報を発信できることに気付けるようにする。	課(3)
	情	2 課題に合わせて必要な情報を収集する。②		情(3)
	整	3 地域の人に伝わりやすくなるよう、情報を整理し、グループごとに発表準備をする。④		整(3) 関(3)
	表	4 「広げよう防災の心」発表会をする。② 5 自分の成長について振り返る。①	○発表方法は、様々な方法からふさわしいものを自分たちで選択できるようにする。 ○自分の成長を振り返るとともに、日頃からできることを考え、今後の生き方について考えるようにする。	表(3) 自(3)

5 本時の展開

本時（全 30 時間中第 4 時間目）

(1) 本時の目標

大地震に備えた地域にするために解決する課題を、理由を明らかにしながら取捨選択し、課題を設定する。

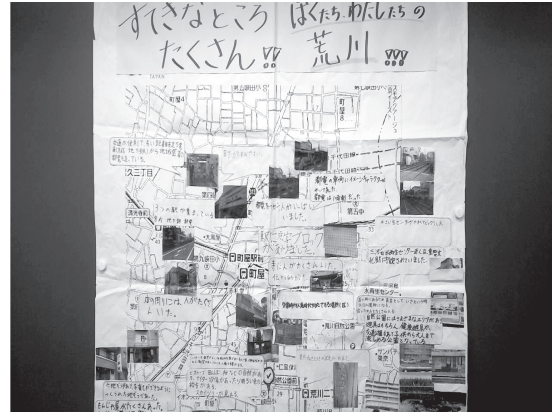
時間	○学習活動・学習内容	◇指導上の留意点 ☆評価規準（評価方法）
導入	○前時までの活動を思い出し、確認する。 ・よいところがたくさんある自分たちの地域は、大地震が起きたときには、非常に危険な地域でもある。	◇課題意識を想起できるように、地域のよさをまとめた地図と危険度ランキングの表を確認する。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 大地震に備えて、自分たちの住む地域のためになることを考え、個人の課題を設定しよう </div> ○個人の調べたい事や疑問に感じている事を確認する。 ・どういったところが危険なのか詳しく調べ、地域の人に知らせたい。 ・多くの人に災害時の対策を知らせたい。	◇目的意識と、対象になる相手を確認する。 ◇地域には様々な人が生活していることを確認する。
展開	○座標軸を活用した課題の設定方法と、視点を確認する。 ○個人で座標軸を用いたワークシートに、付箋を貼りながら整理する。 ・自分の命を守ることが最優先だから、価値が高いと思う。 ・地域の人で消防団に入っている人がいるから、インタビューをすれば実現可能だと思う。 ○グループに座標軸に貼った付箋を説明しながら交流する。 ・事前の備えをしておくことは命を守ることにつながるから価値が高いと思う。 ○個人の課題を設定する。 ・一人一人が自分の命を守ることが大切だから、大きな地震が起きた時の対策を調べ、多くの人に知らせる。 ・家の中での対策を地域の人たちに知らせたい。 ○個人の課題を全体場で発表し、交流する。	◇座標軸の視点は前時までに児童と話し合い、決定しておく。（例「価値が高いと価値が低い」、「実現可能と実現困難」） ◇作業の中で新しい課題が出てきたときには、付箋を書き足してもよいことを伝える。 ◇常に視点を意識して、座標軸のどこに位置付けるとよいかについて話し合いを行うよう助言する。 ◇全体の様子を見ながら、話し合いが活発に行われているグループの話し合いの様子を全体に紹介する。 ◇学習課題を意識した、個人の課題を立てることを確認する。 ☆解決する学習課題を、理由を明らかにしながら選択し、設定している。（ワークシート・発言） ◇児童の発言を整理しながら板書する。 ◇自分の課題との共通点があるかを考え、話を聞く。
まとめ	○次時の活動に対する見通しをもつ。	◇次時に、個人の課題を解決していくための学習計画を立てていくことを伝える。

6 考察

(1) 児童とつくる学習計画

「課題の設定」の学習過程において第6学年として、「もう一度自分たちの地域の良いところを見直そう」と、タブレットPCを活用し、写真を撮りながら地域巡りを行った。その際に、施設やお店だけでなく地域の人に目を向けるようにした。その活動を通して、改めて地域への愛着を感じることができた。

また、静岡県下田市への移動教室での市内巡りの経験を振り返り、東京都荒川区と比較して考えられるようにすることで、客観的に自分たちの地域を見直した。その後、地域の災害時の危険度データを提示することで、児童は自分たちの地域が、災害時には非常に危険な地域だと知り、大切な地域を守るためにできることを調べ、その事を広げていこうと考えた。そして、その課題を解決していくための計画を主体的に考えることができた。



(2) 他者との関わり

「情報の収集」の学習過程では、課題ごとにグループをつくり取り組んだ。グループで協力したり分担したりする中で、多種多様な情報を得ることができた。個人では得られなかった情報もあり、充実した協働的な学習が行えた。

また、単元指導計画上に意図的、計画的に消防団の方等、外部人材との関わりを位置付けた。事前の打ち合わせをしっかりと行い、訓練の内容や、災害前の備えや、災害時の心得について話をしてもらった。その中で児童は、「災害が起きたときには、まずしっかりと自分の身を守る。」「災害に遭ったときには、助け合っていく。」など、自助・共助の観点で話を聞くことができた。

(3) 思考ツールの活用

児童それぞれが考えた課題を、座標軸を使用することで思考を整理することができた。A児は「価値が高い」という観点を、自分の命を守ることに捉えた。調べていきたいことや伝えていきたいことを価値に照らし合わせて付箋に書き出し、思考を整理していた。

また、グループ内での発表では、「災害時に命が守れなければ、備えていたグッズも使うことができないから、自分の命を守る事は一番価値が高いと思う。」とワークシートを活用して発表した。さらに、友達の発表を聞く中で、児童は自分の視点との相違点を考えながら聞くことができた。

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 基礎研究

「探究的・協働的な学習」、「アクティブ・ラーニング」の視点から学習過程の改善を図ったことにより、総合的な学習の時間における児童に育むべき力が明確になった。また、児童の実態を踏まえ、四つの学習過程を意識した単元、及び一単位時間の構成の仕方や授業改善の視点が明らかになった。

(2) 調査研究

児童対象の実態調査から、25%の児童が自分で課題を設定することができないという結果が明らかになった。また、教員対象の実態調査から、41%の教員が、児童が自ら課題を設定するための時間をとれていないことが分かった。このことから、実社会や実生活との関わりを重視した課題を設定するための時間を十分に確保することや、教員も児童も探究的な学習における四つの学習過程を意識していくことが必要であると捉え、研究を進めていった。さらに、34%の教員が外部人材を有効に活用できていないという現状があることから、前例を踏襲するのではなく、外部人材を有効に活用するためにどんな人を招き、またどのような話をしてもらうのかなど、学習計画に位置付けることが大切であると分かった。

(3) 授業研究

児童の興味・関心から必然性のある学習対象との出合いの場を教員が意図的に設け、課題を設定した後に学習計画を立てられるようにした。それにより、自分たちの課題の解決に向けて学習計画を修正しながら、ゴールに向かって主体的に学習する児童の様子が見られた。

立場の違う人や同じ思いをもつ人と関わることで、取組が価値付けられ、学習意欲が増す結果となった。さらに、児童の考えにはなかった他者の考えを得ることで課題を更新することにもつながった。

他教科で学習した思考ツールを活用したことで、目的に合った思考ツールを児童が選択することができ、個々の考えが可視化され、話合いや伝え合いの活動が充実した。また、複数の考えを関連させたり新しい発想が生まれたりすることにもつながった。

2 今後の課題

どのような学習対象であっても、探究の学習過程においては、単元や一単位時間のゴールイメージを児童と共有していくことが大切であると分かった。本研究では、四つの学習過程を児童に示しながら児童と共に学習計画を立ててきたが、その効果的な具体策については分析がまだ不十分である。また、児童が目的に応じて思考ツールを選択できるようにするために、思考ツールの日常的な活用を更に追究していく。

今後は、研究で得られた具体的な指導方法や単元指導計画、及び一単位時間の指導の在り方の普及・啓発を行うことで、より探究的・協働的に学ぶ児童の育成を目指すとともに、自校や地区に総合的な学習の時間の意義を発信していく。

平成28年度 教育研究員名簿

小 学 校 ・ 総合的な学習の時間

学 校 名	職 名	氏 名
世 田 谷 区 立 芦 花 小 学 校	主任教諭	◎ 山 本 裕 也
北 区 立 西 ヶ 原 小 学 校	主任教諭	藤 原 真 由 里
荒 川 区 立 第 二 峡 田 小 学 校	主幹教諭	金 子 昌 史
板 橋 区 立 蓮 根 第 二 小 学 校	教 諭	佐 藤 勇 磨
江 戸 川 区 立 松 江 小 学 校	主任教諭	吉 澤 弘 子
武 蔵 村 山 市 立 第 八 小 学 校	主任教諭	武 田 陽 介

◎世話人

〔担当〕 東京都教職員研修センター研修部教育開発課
指導主事 山本 佳子

平成28年度

教育研究員研究報告書
小学校・総合的な学習の時間

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成28年度第142号〕

平成29年3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 株式会社オゾニックス